

ノスタルジーを連れて、未来へ

新葉ななに初めて会ったとき、彼女の出身地を訊ねた。

「福島です」

その答えに、なぜだか心の中で「ああ。夜汽車にガタンゴトンと揺られて上京してきたんだなあ」という思いがよぎった。

もちろん、そんなはずはない。彼女は25歳。新幹線で飛行機で、日本のどこにでも「ちゃっ」と行って「ぎっ」と帰ってこられる時代に生まれた子である。

なぜそんなふうに思ったのか……。その後彼女の歌声を聴いて、なんとなく合点がいった。

私が生まれ育ったのは、1960年代の片田舎。春の畦道にはレンゲやタンポポが咲きみだれ、夏の入道雲は爽やかな夕立を連れてくる。そんなぼんやりとした風景が広がっていた。

うちの家にテレビがやってきた頃。電話はまだご近所に借りに行くものだったし、離れた土地に暮らす知人たちとの通信手段は手紙だけだった。そして、遠くへ行くとなれば、その方法は夜汽車である。

いまとなつては、古き良き日々。人々が「昭和」と呼んで、懐かしむ時代。

新葉の顔や雰囲気、歌声までもが、その時代の匂いがするのだ。

まるで、押し入れの中で埃にまみれていた古いアルバムをめくって、幼少期を共に過ごした友達に再会したような気分。彼女の「福島です」という言葉に、胸の中で眠っていたノスタルジーみたいなものが揺さぶられたのだと思う。

後日、作詞家として新葉に何を歌わせたいかと改めて訊ねられたとき、私は私が生きてきた時間を、彼女を通してリプライズしてみたいと考えた。

その発端はやはりノスタルジーから、である。

なぜ、いま『テネシーワルツ』なのか？問われても困る。困るけれど、この曲を再生できるのはきつと新葉しかいない。そう思ったのは確かだ。

かつて昭和期に活躍し平成の世を見ることなく亡くなった、江利チエミという素晴らしい歌手がいた。彼女にカバーされ、日本でも大ヒットした『テネシーワルツ』。私の思い出の名曲に、自分の手で新たに日本語詞を書き、新しいサウンドに仕上げてもらった。

だけど、歌を作る作業は、決してノスタルジーからだけではできない。

私自身、皆に知られすぎてしまったほどの歌詞を乗り越えて、新しい『テネシーワルツ』を作るという挑戦があったし、また、新葉にもこの挑戦を受けて、江利さんに並ぶほどのシンガーになってもらいたかった。だからこそ新しい歌詞で歌っていても、そこには偉大な歌手だった江利さんに対してのオマージュが含まれている。

何もかもが早足で過ぎてゆく平成の時代。絶望とか空虚とか、人々特に大人たちはそんな言葉をよく口にする。フト立ち止まっては、昭和はよかったなあなんて呟いて、まるで便利になったことや豊かになったことを、ちょっと後悔したり恨んだりしているみたいだ。

そういった世間の、なんとなくの風潮に、振り向くだけなんてつまらなくありませんか？と、私は小さな波紋を投げかけたかった。

私のささやかな「世間への抵抗」に対して、新葉は新葉なりに、きちんと前向きに、まっとうなまでに真っ直ぐに、古いも新しいもすべて自分の胸で受けとめた。昔の歌だけど、自分と一緒に未来に連れて行こうとしているかのように。

どうやら彼女の意識の方が、私よりもはるかに高く強い。

「歌が好きなんです。とにかく歌いたいです」

それから、そっと息を吸い込んで、こう言った。

「歌手として成功するまで、田舎には帰りたくありません」

そうね。夜汽車にガタンゴトンと揺られてやってきたのだから、簡単には帰れないよね。

青空が正しく青かった時代。その時代の匂いを歌声に表情に残して、新葉ななはいま、未来へと走り出したばかりである。

及川眠子

及川眠子 代表曲

Wink「愛が止まらない」「淋しい熱帯魚」、やしきたかじん「東京」、新世紀エヴァンゲリオン主題歌「残酷な天使のテーゼ」など多数。